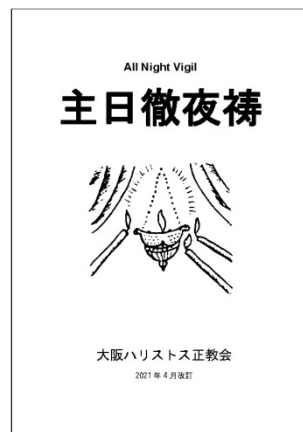


日替わり部分
八調経 卷1

4 調

常に変わらない枠組みとなる



の楽譜の

4調マークの箇所に挿入して組み立てる

スボ夕晩 課

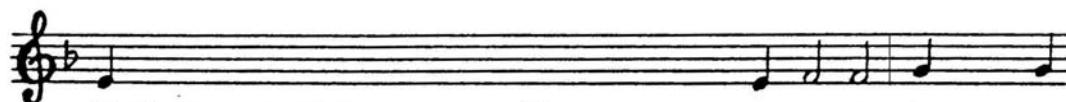
【首唱(103)聖詠】「我が霊や」、【大連禱】

【カフィズマ】第一段「悪人の謀」歌う、

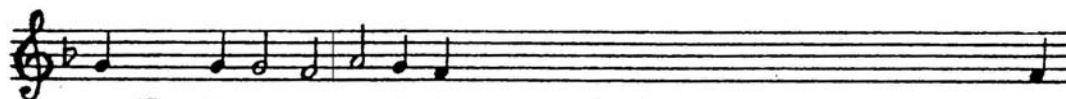
【小連禱】

4 調

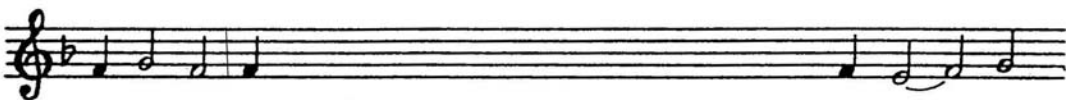
「主や、爾によぶ」 主日 第4調



主や汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ 主やわれ



に聞きたまえ 主やなんじに呼ぶすみやかに我れにいたり



たまえ 汝に呼ぶときわが祈りの声をいれたまえ



主やわれに聞きたまえ ねがわくは我が祈りは香炉の香りの



ごとく汝がかんばせの前のぼりわが手をあぐるはくれ



の祭のごとくいられん 主やわれに聞きたまえ

句、我が霊を獄より引き出して、我に爾の名を讃榮せしめ給へ。

ハリストス神よ、我等絶えず爾が生命を施す十字架に伏拜して、爾が三日目の復活を讃榮す。蓋全能の主よ、爾は此を以て人の朽ちたる性を新にして、我等に復天に升るを賜へり、獨仁慈にして人を愛する主なればなり。

句、爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

救世主よ、爾は甘じて十字架の木の釘せられて、木の誠を犯しし罰を解けり、有能者よ、地獄に降りて、神として死の縛を断ち給へり。故に我等爾が死よりの復活に伏拜して、歡びて呼ぶ、全能の主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

主よ、爾は地獄の門を破り、爾の死を以て死の國を滅し、人類を朽壞より釋きて、世界に生命と不朽と大なる憐とを賜へり。●以下適宜省略されることが多い

又 讚頌、アナトリーの作。

句、願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

人よ、來りて、救世主の三日目の復活を歌はん。我等此に因りて地獄の釋き難き縛より脱れ、皆不朽と生命とを受けて呼ぶ、十字架に釘せられ、瘞られて、復活せし獨人を愛する主よ、爾の復活を以て我等を救ひ給へ。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

救世主よ、諸天使及び人人は爾の三日目の復活を歌ふ。此に因りて地の極は照され、我等皆敵の奴隷より脱れて呼ぶ、生を施す全能の救世主、獨人を愛する主よ、爾の復活を以て我等を救ひ給へ。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

ハリストス神よ、爾は銅の門を破り、柱を折きて、罪に陥りし人類を復活せしめ給へり。故に我等聲を合せて歌ふ、死より復活せし主よ、光榮は爾に歸す。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

主よ、爾が父より生ることは年歳なくして永久なり、童貞女より身を取ることは人人の爲に測り難く言ひ難し、地獄に降ることは悪魔及び其使等の爲に懼るべし。蓋爾は死を踐みて、三日目に復活して、人人に不朽と大なる憐とを賜へり。

又生神女の讚頌、アモレイのパワエルの作。第八調。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、

彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

純潔なる生神女よ、爾の血より身を取りし萬有の神は爾を信者の爲には帡幪、患難急迫に在る者の爲には轉達及び扶助者、颶風に遇ふ者の爲には穩なる港と顯し給へり。故に爾凡そ爾の神聖なる帡幪の下に趨り附く者を諸の憂愁及び煩悶より救ひ給へ。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

至福なる女宰よ、我爾の神聖なる名を常に尊みて崇め、敬み讃めて歌はん。祈る、爾の帡幪の下に趨り附く我を諸敵の悦と爲さずして、爾の尊き祈禱の翼を以て常に我を悉くの誘惑より損はれざる者として護り給へ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

至浄なる神の母よ、慶べ、信者の倚頼よ、慶べ、世界の潔淨よ、慶べ、爾の諸僕を諸の憂愁より脱れしむる者よ、慶べ、死を滅して生活を與ふる者よ、慶べ、慰むる者よ、慶べ、轉達者よ、慶べ、避所よ、慶べ。

【生神女ドグマティク】

光栄は父と子と聖神に帰すいまもいつも よよにアミン

生神女や汝によりて神の先祖となりし預言者ダビデは

汝に大いなることをなせしものになんじのことを歌いよべり

女王は汝の右に立てりよけだし父なく汝より甘んじて人の

性をとりしか みえすおおいにして豊なるあわれみを

たもつの主はなんじが母にして命のなかだちたるを表わして

欲にくちたるおのれのかたちをあらため山の中に

迷いし羊をえて肩におき父の前にたづさえおのれの旨に

よりてこれを天軍にあわせ て世界を救いたまえり

◇【聖にして福たる】 →通常部分（P6「聖にして福たる」へ戻る

【スポタのポロキメン】（6調）第92聖詠1—5

重連祷

誦経「主や我等を守り」

増連祷

（増連祷が終わったら）

4 調

挿句のスティヒラ

挿句に主日の讃頌、第4調。

主よ、爾は十字架に上りて、我が原祖よりの詛を滅し、地獄に下りて、世の囚人を釋き、人類に不朽を賜へり。故に我等歌ひて、生命と救とを施す爾の復活を崇め讃む。

又 讃頌

句、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

獨有能なる主よ、爾は木に懸けられて、悉くの造物を震はせ、墓に入れられて、墓に居る者を復活せしめて、人類に不朽と生命とを賜へり。故に我等歌ひて爾の三日目の復活を崇め讃む。

句、故に世界は堅固にして動かざらん。

ハリストスよ、不法の民は恩主に對して恩を知らざる者と顯れて、爾をピラトに解して、十字架に釘せん爲に定めたり。惟爾は甘じて葬を忍び、神として己の權を以て三日目に復活して、我等に終なき生命と大なる憐とを賜へり。

句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

女等は涙を流し墓に至りて、爾を尋ねしに、得ずして、歎き泣きて呼びて曰へり、哀しい哉我が救世主、萬有の王よ、爾如何ぞ竊まれたる、何の處か爾の生を施す身を隠す。天使は彼等に對へて曰へり、泣く勿れ、往きて傳へよ、主は復活して我等に喜を賜へり、獨仁慈の主なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

至りて玷なき者よ、爾の諸僕の祈禱を顧みて、堪へ難き攻撃を我等より退け、諸の憂苦を我等より遠ざけ給へ、我等は爾を一つの堅固なる恃むべき錨として有ち、爾の轉達を得たればなり。女幸よ、願はくは我等爾を呼ぶ者は耻を蒙らざらん、盍に我が切なる祈を應へ給へ、蓋我等中心より爾に籲ぶ、女幸、衆人の佑助と、歡喜と、庇護と、我等の靈の拯救なる者よ、慶べ。

→通常部分 P10 「シメオンの祝文」へ戻る

「聖三祝文」「至聖三者」「天主經」

司祭 蓋 國と權能と光榮は爾父と子と聖神^oに歸す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

「生神童貞女や、慶べよ」

「願わくは主の名は崇めほめられ……」

早 課

【六段の聖詠】【大連禱】に続いて

<●カフィズマ、セダレンは省略>

4 調

主は神なり、主日トロパリ

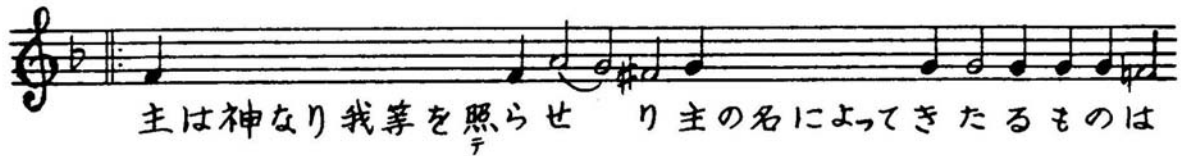
主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、

(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、

(第2句) 彼等我を囲み我を環れども、我主の名を以て之を敗れり、

(第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、

(第4句) 工師が棄てし所の石は屋隅の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、



→通常部分 P14 【ポリエレイ】「主の名を讃め揚げよ」

<ポリエレイ後のセダレン、ネポロチニ省略>

【復活のエフロギタリア】「主や爾は崇め讃める」

【小連禱】【アンティフォン】 4 調

4 調

【アンティフォン】

○品第詞、第 4 調。第一倡和詞。(毎句復唱す。)

我が ^{いとけな} 幼き ^{とき} 時より多くの ^{おお} 愆は我を ^{よく} 攻む、^{われ} 吾が ^せ 救世主よ、^わ 爾 ^{きゅうせいしゅ} 親ら我を守りて ^{なんじみずか} 救ひ ^{われ} 給へ。^{まも} ^{すく} ^{たま}
シオン ^{にく} を ^{もの} 惡む者は ^{しゅ} 主より ^{はずかしめ} 辱を受けよ、^う 爾等 ^{なんじらくさ} 草の火に ^ひ 於けるが如く ^お 枯ら ^{ごと} されんと ^か すればなり。

光榮、今も

^{せいしん} 聖神にて ^{およそ} 凡の ^{たましい} 靈は ^い 活かされ、^{きよき} 清浄を以て ^{もつ} 愈 ^{いよいよ} 上り、^{さんい} 三位の ^{いったい} 一體にて ^{おうみつ} 奥密にて ^{てら} 照さる。

今も、同上。 ●以下 省略

提綱、第 4 調

^{しゅ} 主よ、^お 起きて ^{われら} 我等を ^{たす} 助けよ、^{なんじ} 爾の ^{あわれみ} 憐に ^よ 困りて ^{われら} 我等を ^{すく} 救ひ ^{たま} 給へ。

句、「神よ我等は己の耳にて聞けり」

Zm 4調

主よ、起きて 我等を たす け よ、

爾の憐れみによって 我等を憐れみたま え。

→通常部分 P17

【福音の読み】

【福音後のスティヒラ】「ハリストスの復活を見て」

輔祭 「神よ爾の大いなる憐れみによって」「主憐れめよ」12 回

4 調

カノン

イルモス簡単バージョン

主日のカノン、第4調〈第1のカノン(復活)のみ、第2(十字架復活)、第3(生神女)は省略〉

第一歌頌

イルモス、^{いにしえ}古のイスライリは^{あし}足を濡らさずして^{うみ}海の^{くれない}紅の^{ふち}淵を^{わたり}渡り、^の野に^{おい}於て^{じゅうじかた}モイセイの十字形の手にて^{ちから}アマリクの^か力に勝てり。

第1歌頌 ① ②

いにしえのイスライリは 足を濡らさずして

① ②

海の紅の淵を わたり 野において モイセイの

① ③

十字形の手にて アマリクの ちからに 勝てり

附唱、^{しゅ}主よ、^{こうらい}光榮は^{なんじ}爾の^{せい}聖なる^{ふっかつ}復活に^き歸す。

^{しゅさい}主宰よ、^{なんじ}爾は^{しじょう}至淨なる^{じゅうじか}十字架の^き木に^あ上げられて、^{われら}我等の^{だらく}墮落を^{あらた}改め、^き木に^よ縁る^{ざんがい}殘害の^{きず}傷を^{いや}醫し^{たま}給へり、
^{なんじ}爾は^{じんじ}仁慈^{ぜんのう}全能の^{しゅ}主なればなり。

附唱、^{しゅ}主よ、^{こうらい}光榮は^{なんじ}爾の^{せい}聖なる^{ふっかつ}復活に^き歸す。

^{かたど}像り^{がた}難き^{なんじ}ハリストスよ、^{からだ}爾は^{はか}體にて^あ墓に^{たましい}在り、^{かみ}靈にて^{じごく}神として^あ地獄に^{とうぞく}在り、^{とも}盜賊と^{らくせん}偕に^あ樂園に^あ在り、
^{ちちおよ}父及び^{せいしん}聖神と^{とも}偕に^{ほうざ}寶座に^あ在りて、^{いっさい}一切を^み満て^{たま}給へり。

「光榮」「今も」 生神女讚詞

^{なんじ}爾は^{たね}種なく^{ちち}父の^{むね}旨を^{もつ}以て^{しんせい}神聖なる^{しん}神に^{より}て^こ子を^{ほら}孕み、^み身にて^う生み^{たま}給へり、^こ是れ^{ちち}父より^{はは}母なくして、^{われら}我等
の^{ため}爲に^{なんじ}爾より^{ちち}父なくして^{うま}生れ^{たま}給ひし^{しゅ}主なり。

〈十字架復活のカノン、生神女のカノンは省略〉

第三歌頌

イルモス、ハリストスよ、爾の教會は爾の爲に樂しみて呼ぶ、主よ、爾は我が能力と避所と堡障なり。(楽譜は次ページ)

第3歌頌

ハリス ト-ス よ なん じ の 教 かい は
 なん じ の た め に た の し み て 呼 - ぶ
 主 よ、 爾 は 我 が ち か ら と 避 所 と か た め な り

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

生命の樹、神靈の眞の葡萄は十字架に懸りて、衆人に不朽を流し給ふ。

至大至嚴にして地獄の傲慢を倒しし主は不朽の神として今肉體を以て復活し給へり。

「光榮」「今も」 生神女讃詞

神の母よ、爾は獨地に居る者の爲に性に超ゆる諸福の中保者と爲れり、故に我等爾に慶べよを捧ぐ。

【小連禱】 <●セダレンは省略>

第四歌頌

イルモス、教會は爾義の日は十字架に擧げられしを見て、並び立ちて正しく呼べり、主よ、光榮は爾の力に歸す。

第4歌頌 ① ② ③ 三拍子

教 かい は なん じ 義 の 日 が 十 字 架 に
 擧 げ ら れ し を 見 て なら び 立 ち て 正 し く 呼 べ り
 主 よ 光 榮 は なん じ の ち か ら に 歸 す

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

爾は十字架に升りて、甘じて衣たる爾の至淨なる肉體の苦を以て我が苦を醫し給ふ。故に我等爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

主宰よ、死は爾の罪なくして生を施す身を吞みて、宜しきに合ひて殺されたり。故に我等爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。

「光榮」「今も」 生神女讚詞

童貞女よ、爾は婚姻に與らずして生めり、生みし後にも亦童貞女と現れ給へり。故に我等疑なき信を以て黙さざる聲にて爾に呼ぶ、女宰よ、慶べ。

第五歌頌

イルモス、我が主よ、爾は光、信じて爾を崇め歌ふ者を聞き無智より引き出す聖なる光にして、世界に來り給へり。

第五歌頌



我が主よなんじはひかり信じて爾を崇め歌うものを
聞き無知より引きいだす 聖なるひかりにして
世界に 來たり たまえり

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

主よ、爾は慈憐に由りて地に降り、爾は木に擧げられて陥りし人の性を擧げ給へり。

ハリストスよ、爾は我が罪に因る罰を負ひ給へり、宏恩の主よ、爾は神聖なる爾の復活を以て死の疾を除き給へり。

「光榮」「今も」 生神女讚詞

神の聘女よ、我等爾を敵に對して勝たれぬ武器として有つ、我等爾を堅固及び我が救の冀望として得たり。

第六歌頌

イルモス、憐に由りて爾の脅より流れし血にて悪魔の祭の血より浄められし教會は爾に呼ぶ、主よ、讃揚の聲を以て爾を祭らん。

第6歌頌 ① ②

憐れみによりて 爾の脇より流れし 血にて

悪魔の祭の血より 浄められし 教かい は

② ③
なんじに 呼ぶ 主よ、讃め揚げの 声を以て なんじを祭らん

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

爾は十字架に上り、力を帯びて、暴虐者と戦ひ、神として之を高さより墜し、勝たれぬ力を以てアダムの復活せしめ給へり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ハリストスよ、爾は美しく輝きて墓より復活して、爾の神聖なる力を以て諸敵を散らし、神として衆を樂に充て給へり。

「光榮」「今も」 生神女讃詞

嗚呼諸奇跡に超ゆる新なる奇跡や、童貞女は夫を識らずして胎内に萬有を保つ主を孕みて、狭からざりき。

【小連禱】

【小讃詞】 第四調。

我が救世主及び贖罪主は神として地に生れし者を桎梏より釋きて、墓より復活せしめ、地獄の門を破りて、主宰として三日目に復活し給へり。

<●同讃詞 省略>

第七歌頌

イルモス、アウラアムしゅうしやの少者はいりりペルシヤの爐あに在りて、焰ほのおよりも強く敬虔けいけんの愛あにあかされて呼よべり、主しゅよ爾なんじが光榮こうえいの殿でんに於おて爾なんじは崇あがめ讃ほめらる。

第7歌頌 ①

アウラアムしゅうしやの少せう者はいりりペルシヤの爐あにありて

焰ほのおよりもつよく敬虔けいけんの愛あに焼やかれて呼よべり

主しゅよ、爾なんじが光榮こうえいの殿でんにおいてなんじはあがめ讃ほめらる

附唱、主しゅよ、光榮こうえいは爾なんじの聖せいなる復活ふっかつに歸きす。

ハリストスしんせいの神聖しんせいなる血ちを以もつて洗あらはれて不朽ふきゆうに召めされたる人類じんるいは感謝かんしゃして歌うたふ、主しゅよ、爾なんじが光榮こうえいの殿でんに於おて爾なんじは崇あがめ讃ほめらる。

附唱、主しゅよ、光榮こうえいは爾なんじの聖せいなる復活ふっかつに歸きす。

ハリストスよ、我われら等の復活ふっかつの源みなもとたる爾なんじの墓はかは、生命いのちを施ほどこす者もの、地堂じどうより美うるわしき者もの、實じつに凡およその王おうの宮みやよりも光ひかれる者ものとして現あらわれたり。

「光榮」「今も」 生神女讚詞

至上しじょうしや者せいの聖せいにせられたる神妙しんみょうの居處すまいよ、慶よろこべ、蓋けだし生神女しんじよよ、爾なんじに縁よりて欣喜よろこびは斯かく呼よぶ者ものに賜たまはりたり、至いたりて無玷むでんなる女じよさい幸なんじよ、爾なんじは女おんなの中うちに祝福しゆくふくせられたり。

第八歌頌

イルモス、ダニエルは獅子しし穴あなに在りて手てを伸のべて、獅子ししの口くちを閉とじ、敬虔けいけんの篤あつき少者しょうしやは徳とくを帯おび、火ひの力ちからを滅ほして呼よべり、主しゅの悉しゆくこの造物ぞうぶつは主しゅを崇あがめ讃ほめよ。

第8歌頌 ① ②

ダニエルは獅子しし穴あなにありて獅子ししのくちを閉とざし

敬虔けいけんの篤あつき少者しょうしやは徳とくを帯おび火ひの力ちからを消くして呼よべり

① 敬虔の篤き少者は 徳を帯び火の力を消して呼べり
 ② 主の悉くの造ぶつは 主をあがめ讃めよ

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

主宰よ、爾は十字架に手を伸べて萬民を集め、爾を讃頌する唯一の教會を顯して、在地在天に同心に歌はしむ、主の悉くの造物は主を崇め、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

白衣にして復活の近づき難き光に輝ける天使は女等に現れて呼べり、何ぞ生ける者を死者の如く墓に尋ぬる、ハリストスは實に興きたり、我等彼に呼ばん、悉くの造物は主を歌ひて萬世に讃め揚げよ。

「父と子と聖神の一なる神を讃め揚げん、今も・・・」 生神女讃詞

至淨なる童貞女よ、爾は獨萬族の中に神の母と現れたり、純潔なる者よ、爾は神性の居處と爲りて、近づき難き光の火に焚かれざりき。故に神の聘女マリヤよ、我等皆爾を崇め讃む。

【生神女の歌】

わが心は主をあがめ わがたましいは神わが救主を
 よろこぶ ヘルヴィムよりとくく セラフィムに
 ならびなくさか えみさおをやぶらずして神言を
 うみし実の生神女たるなんじをあがめほむ

以下同様に

第2句 その婢の卑しきを顧み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく榮え……

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世世彼

を畏るる者に臨まん

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ給へり。

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラムと其の裔を世世に憐れむ事を記憶し給へり、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第九歌頌

イルモス、童貞女よ、手にて斫られざる隅石ハリストスは、爾斫られざる山より斫り分けられて、離れたる性を合せ給へり。故に我等楽しみて、爾生神女を崇め歌ふ。

第9歌頌 ① ②

童 貞 女 よ、 手 に て 斫 ら れ ざ る 隅 石 ハ リ ス ト ス は

① 爾 斫 ら れ ざ る 山 よ り 斫 り 分 け ら れ て

② 離 れ た る 性 を 合 わ せ た ま え り ゆ え に わ れ ら

① た の 楽 し み て なん じ 生 - 神 女 を あ が め 崇 め う た う

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

我が神よ、爾は全き神性を以て混淆せざる合一に於て全き我を受けて、多くの慈憐に由りて身に於て十字架に忍びたる爾の苦しみを以て全き我に救を賜へり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

爾の門徒は爾の墓の啓かれ、爾の復活に由りて神の身を裹みし布の空しくなりたるを見て、天使と偕に呼べり、主は實に興き給へり。

「光榮」「今も」

聖三者讚詞

われら 衆信者は神性の唯一にして三位なる神に伏拜して、混淆せざる位に於て同能同尊なる父、子、聖神
 を尊みて、崇め讃む。

→通常部分へ戻る P27

【小連禱】

「主我等の神は聖なり」

●【差遣詞】省略

4 調 【讃揚歌とスティヒラ】

およそいきあるものは主をほめあげよ 天より主を
 ほめあげよ いとたかきにかれをほめあげよ
 ほめ歌は汝 かみに帰す そのことごとくの神使や
 かれをほめあげよ そのことごとくの軍やかれをほめ
 あげよ ほめ歌はなんじかみに帰す

→通常部分 P30 に戻る 【大詠頌】を歌う

【定規のトロパリ】

【重連禱、増連禱】 早課の終わり。発放詞。

一時課

<一時課の変更箇所は、トロパリ、コンダクのみ>